

ウルトラマンを見る大人たち ーウルトラマンへのタブーとファンである理由ー

志村 魁聖

ウルトラマンシリーズは子ども向け作品として広く知られ、大人が視聴するという行為はタブー視されることもある。しかし実際には子どもだけでなく大人までそのファン層は幅広い。そこで作品のファンたちは、子ども向けと言われるこの作品をなぜ視聴するのかに興味を持った。佐藤・神谷（2013）は作品を登場人物のドラマ部分と、変身後の戦闘部分に分けられるとし、作品のドラマ性について指摘した。ウルトラマンを題材とするメディア研究は数多いが、受け手側であるファンの目線で行われた研究は進んでいない。

そこで本研究は、ファンがどのような理由で作品を視聴するのか、タブーをどう感じているかをライフストーリーに基づいて明らかにするため、半構造化インタビューによる質的調査を行った。調査対象は18歳以上で、作品の主な対象年齢である小学校低学年前後から外れた時期に、作品の視聴や玩具の購入といったファン活動をしている8名である。

作品を視聴する理由は主に二つにわけられ、ドラマ性やメッセージ性を求める場合（大人向け部分）、そして特撮シーンや格好良さ（子ども向け部分）を求める場合である。また、人々のタブーに対する態度は二つあり、作品のファンである事を周囲に「隠す」場合と、周囲の目を気にせず「明らかにする」場合があった。

まず、10歳前後に、今回の調査対象者で作品が子ども向けであることに起因したタブーを受けていた人は全員が大人向け部分を特に好んでいた。この人々は過去に作品の好みは子ども向けから大人向けへと変わった経験を持っており、その時期とタブーを受けた時期がほぼ一致していた。そのため、この人々は作品の好みが変わった時に、作品の視聴をタブー視された経験から視聴を合理化させたと考えられる。また、こうしたタブーを感じていないという人には大人向け部分を好む人と子ども向け部分を好む人の両方が存在した。これは年齢を重ね、様々な経験を通して好みが変わった人と、子供時代のタブーがないゆえに子ども向け部分を好む事に抵抗が少ない人がいるためと考えられる。

ファンであることを隠すとしたのは二人の対象者であり、一方は子供時代にタブーを感じていた人、もう一方はその経験がないが大人になってからタブーを感じたことのある人だった。前者は他の視聴を明らかにする人と違い、家族にも趣味を話せないという経験があり、友人と家族における二重のタブーが存在したためと、ファンであることを隠すようになったと考えられる。一方成長後にタブーを感じたという人は、子ども向け部分への抵抗感がなくとも、タブーからの自衛のために視聴を隠そうとすると言える。

本研究では10歳前後のタブーの有無が作品を視聴する理由に深く関わることが明らかになった。多くの人々はタブーがないと語りながらも、過去に感じたタブーの影響を無意識化で感じており、作品の好みや周囲への対応にその影響が現れている。

（指導教員 後藤嘉宏）